

春日進キャンパス

5月15日(土)
10:00~12:00



災害後の心のケア ～こころの減災研究会の取り組み～

教養部教授 石川 雅健

秋名城公園キャンパス

10月21日(木)
18:00~20:00

地震大国日本において連日微細な地震が観測される中、近い将来に発生が予測される南海トラフ大地震や都市直下型地震に備えた防災・減災の取り組みが様々な立場からなされています。1995年1月に起きた阪神淡路大震災を契機に、災害後の心のケアについて広く注目されるようになり、2011年3月の東日本大震災では、震災直後から心のケアの取り組みが始まりました。しかし「心のケア」は災害直後の問題としてだけではなく、事前に備える「心の減災」という考え方や取り組みも重要になってきます。

今回の講座では、災害前の備えとしての「心の減災能力」の育成について、名古屋大学こころの減災研究会の取り組みや資料をご紹介します。災害時にはどのような心理的影響を受けるのか、そしてそれらに対するスキルを高めるためにはどのようにすればよいのかなど心理学的な対処法をご紹介します。受講される方々の防災・減災に向けての一助となればと考えております。



講師紹介：いしかわ まさよし

専攻：臨床心理学、文化心理学

略歴：名古屋大学大学院環境学研究科（心理学）・同大学大学院人文学研究科（文化人類学）博士課程（後期）満期退学、臨床心理士、公認心理師、日本人間性心理学会理事。

主な著書・論文：人間性心理学ハンドブック（共著、創元社、2012）、学校コミュニティへの緊急支援の手引き第3版（共著、金剛出版、2020）、Northern Illinois University (NIU) におけるシューティング事件からみた大学の危機管理（「心理臨床」名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要第26号 2011）、沖縄の精神文化と超越（人間性心理学研究第37巻2号2020）など。

春日進キャンパス

5月29日(土)
10:00~12:00



大規模災害と薬 ～平常時の備えと災害時の対応～

薬学部講師 山本 清司

秋名城公園キャンパス

11月4日(木)
18:00~20:00

大規模災害の被災地では特別な措置が講じられ、健康保険証がなくても、医療機関の受診や処方薬の受け取りに健康保険が適用されたり、さらに一部負担金の徴収が猶予または減免されたりします。また、昨今の規模大規模災害において、医師や歯科医師から交付された処方せんがなくても、患者は処方せん医薬品を受け取ることができる、厚生労働省が通知を出しています。これらの状況では、患者が平常時に使用している薬の名称や用法用量が示されたお薬手帳などがあれば、医療従事者は円滑に対応することができますが、そうでない場合、対応が難航する可能性だけでなく、例えば患者の曖昧な記憶や思い込みを頼りに対応すると、普段と異なる薬を、そうとは知らずに使ったり、誤った用法用量による過量投与や過少投与を招いたりする可能性があります。このことから、2011年の東日本大震災では、お薬手帳の重要性が再確認されました。

お薬手帳に代表される、患者やその家族などによる平常時の備えや災害時の対応と併せて、医療従事者の対策や薬の供給についても紹介し、薬に関連する災害対策を考えて頂くきっかけになればと思います。



講師紹介：やまもと せいじ

専攻：医療薬学

略歴：薬剤師。2009年4月より名古屋市立大学病院に勤務し、2018年10月より現職。2017年、名古屋市立大学大学院薬学研究科博士後期課程修了、博士（薬学）。

春日進キャンパス

5月22日(土)
10:00~12:00



自然災害と生産ネットワーク ～製造業における災害のリスク～

経済学部講師 古田 学

秋名城公園キャンパス

10月28日(木)
18:00~20:00

世界各地での自然災害による甚大な被害がテレビや新聞等で報じられるのを目にする。日本では台風や地震による被害や、タイでは大洪水による被害などが挙げられる。これらの災害は、人々の生活だけではなく、モノづくりの現場にも多大な影響を与える。例えば、前述のタイ洪水であれば、工場に水が入り込んでしまい、機械が動かせなくなり生産を停止せざるをえない状況になった。タイ現地企業だけでなく、トヨタやホンダといった日系企業の生産被害に関しても同様である。影響は現地だけでなく、タイで作っている部品の生産が停止してしまったことにより、日本での完成車の生産も滞ってしまった。

上記の例は、1つの製品を多数の国の工場を通じて作り上げていく国際分業が進む中で、自然災害の影響が一国だけではなく、世界中に及ぶことを示している。一国の自然災害を国際的な生産ネットワークの中で捉え直してみることで、離れた場所での災害が自らの生活にも影響を及ぼす可能性があることを、特に日系企業の進出が著しいアジア各国における自然災害の事例をもとに考察する。



講師紹介：ふるた まなぶ

専攻：開発経済学、国際経済学

略歴：京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。神戸大学経済経営研究所学術研究員を経て愛知学院大学経済学部勤務。

主な著書・論文：「インド・オートバイ産業の生産性分析」佐藤隆広編『インドの産業発展と日系企業』（神戸大学経済経営研究所、2017年）

春日進キャンパス

6月5日(土)
10:00~12:00



中世日本の災害と復興 ～地震・津波を中心に～

文学部（歴史学科）教授 福島 金治

秋名城公園キャンパス

11月11日(木)
18:00~20:00

日本は古くから多くの災害にみまわれてきました。2011年の東日本大震災で経験しましたように、大地震には津波・火災・地割れ・山崩れなどが複合しており、日々の暮らしや交通・通信に重大な被害をもたらしました。こうした事情は中世においてもみられます。今回は、政治・社会の変動にも大きな影響をおよぼした明応七年（一四九八）の東海大地震、慶長元年（一五九六）の伏見・桃山地震の二つの大地震をみてみたいと思います。

明応の地震は当時の東日本海運の拠点であった伊勢大湊などを破壊し、浜名湖が海と直結するようになったことでも知られています。被害の大きさもさることながら、地震の混乱の中、伊豆で北条早雲が覇権を築くなど本格的な戦国大名の時代への転換点となりました。一方、慶長の地震は秀吉の京都伏見城を破壊し、甚大な被害を西日本にもたらしました。朝鮮出兵での朝鮮側の講和使節の来日中で、地震後に秀吉は家康らの批判をおさえて朝鮮への再出兵を決定していきます。今回は、地震後の政治変動と復興の問題をあわせ考えていきたいと思っています。



講師紹介：ふくしま かねはる

専攻：日本中世史

略歴：九州大学大学院博士後期課程中退。神奈川県立金沢文庫主任学芸員を経て、愛知学院大学文学部教授（日本中世史）

主要著書：『金沢北条氏と称名寺』（吉川弘文館、1997年）、『安達泰盛と鎌倉幕府一霜月騒動とその周辺―』（有隣堂、2006年）、編著『学芸と文芸 生活と文化の歴史学 第9巻』（竹林舎、2016年）

※春季日進キャンパス公開講座と秋季名城公園キャンパス公開講座は同じテーマ、内容となりますが、申込みは別となります。

※春季日進キャンパス公開講座と秋季名城公園キャンパス公開講座は同じテーマ、内容となりますが、申込みは別となります。